

趣 味

鯨坂純朗さんからリレートークを引き継いだわけですが、彼とは能開大入学時からのつき合いですから、もう14年ほどになります。新入生ガイダンスで話をしたところ、彼の実家と私の両親との実家が近いということで話がはずんだのがきっかけでした。彼は寮生でしたが、下級生は寮の飲み会ではすぐ飲まされる（量は多いし、質は悪い酒らしかった）ようで、私の下宿に逃げてくるのがたびたびありました。そんな彼もすでに3児の父親となりました。

私にも2歳半の男の子がいますが、子供を見ていて思うことは、2歳半で人間の感情を十分備えているということです。うれしいことや楽しいことは腹を抱えて笑うし、自分の思い通りにならなければ怒り、また泣く。他の子供に意地悪をする、大人に対しておべっかも使い、いたずらもする。そして、熱中できる趣味まであるのです。

子供には、生活のすべてが勉強もしくは遊びであり、趣味とはいえないのですが、熱中して毎日続けているため、あえて趣味と書きました。彼の趣味はけんか山とウルトラマンです。

けんか山とは、妻の実家のある富山県高岡市伏木のお祭りのことです。この祭りは、昼間は町内ごとにきれいに飾り立てられた曳山を、町内の男衆が数十人で引き練り歩きますが、夜になると飾りをすべて提灯にかえ、山同士を激しくぶつけあいます。昼間の優雅さと夜間の壮健さとのギャップに驚かされます。彼は、その曳山の上で勇壮に振る舞う舞う曳子頭（ひきこがしら）となり、そこらじゅうを練り歩きます。家の中だろうと買い物中のスーパーであろうと。すでに、富山で祭りを見て3ヵ月が経ちますが、いまだにビデオを見ては練習に励む毎日です。ここ

は富山から遠く離れた熊本であり、スーパーでそのような行動をとられると、一緒にいる親としては大変恥ずかしい思いをします。

もう一つの趣味ウルトラマンは、子供ならば皆大好きでしょうが、彼はちょっと違います。彼にとってウルトラマンは憧れだけの対象ではありません。彼自身がウルトラマンなのです（たまに怪獣にも変身するが）。ウルトラマンショーを見に行っても、他の子供は食い入るようにショーを見ているだけですが、彼はそれ自身に成りきっているため、客席で怪獣と戦うのです。大声を張り上げながら。これまた親は赤面です。

そのような彼ですが、親としては感受性がとても強い子なのだろうと思っています（親バカの極致）。その感性をいかに伸ばしてやるかが親の努めなのでしょうが難しい問題です。まあ、トンビが鷹を生むことはないでしょうから、あまり子供に過大な期待をするのはやめておきます。

リレートークは、ポリテクカレッジ沖縄の本田健司さんに引き継ぎます。最近連絡をとっていませんが、彼は元気になっているでしょうか。



イヤホンは命綱

東京錦糸町にある生涯職業能力開発促進センター、愛称アビリティガーデンでは、今日も7階建ての建物の中で、たくさんの方たちが自分自身のスキルアップを図るため、さまざまな講座を熱心に受講されています。

私が、5階にあるスタジオから衛星通信を使って全国47都道府県の雇用促進センターに配信されている“アビリティガーデンネット”という番組の司会を務めさせていただいてから早1年。この番組の特徴は、一般の放送とは違い、スタジオの講師の方と各雇用促進センターの会場の受講生が

「レスポンスアナライザ」という機械を使って会話することができるということです。この番組が縁で、今回、長野雇用促進センターの山田裕介さんよりバトンを渡していただいたわけですが、未熟者の私にとりまして、このバトンは正直重く感じられます。でも、せっかくいただいたバトン。もたもたながら走ってみますのでどうか少しの間おつきあいください。

番組と関わることになったのは、ちょっとした好奇心がきっかけ。プロデューサーから「今度、一方通行ではなく双方向でやりとりのできる画期的

秀句つれづれぐさ

本宮 鼎三

藪巻きのしまひの梯子はづしけり

七田谷まりうす

句集『初秋』所収、平六作。「藪巻き」は冬季、雪折れを防ぐため、大切な庭木や竹など筵で包み、縄で巻くことをい、「竹巻」「菰巻」という同じ意味の季語もある。現今では、もっぱら植木職の人がこういう仕事に従事している。この句の意味は明瞭、この仕事に携わった人の最後の仕事は「梯子」を樹からはずすこと。後は雪の来るのを待つばかり、安堵感と寂寥感が重なっている句。故原八束、有馬朗人両師の門下、「秋」「天鳥」同人。

冬帽子眉まで被りきて若し

寺井 谷子

句集『未来』所収、平六作。俳句には大切な要素が三つある。即興・挨拶・滑稽（山本健吉説）。この句は「挨拶」と私は読んだ。極寒の日。深く帽子をかぶってきた友人。待ち合わせたのかも知れない。帽子に眉まで隠れている。かえってそれが若く見える…という友人を励まし称える賛辞の句だ。故横山白虹の四女、現代俳句協会賞、北九州市市民文化賞を受賞、「自鳴鐘」編集人、同誌および「花曜」同人。

な番組をするんだ」「コンピュータを操作しながら番組を進行してほしいんだけど」と連絡をいただいたのです。それまではリポーターとして全国を取材して回る仕事が多かったのですが、スタジオも懐かしく思っていた頃。タイミングが悪い…。いや、絶妙だったんですね（笑）

ただ、実際携わってみると「双方向」というほかに例のない番組の方向性や方法を模索していきながらの毎日。胃がキューと音を立てそうなくらいの緊張感で始まった初めての番組配信から、時には冷や汗を流し、時には頭の中が真っ白になることにおびえながら、この番組独特のスタイルに翻弄されどおしの日々がまだ続いているのです。

番組は、カメラや音声など技術スタッフ、演出等の制作スタッフ、総勢15人ほどの“個性派ぞろい”でつくられています。本番当日は朝から打ち合わせや技術リハーサルを行いますが、何が起こるかわからないのが生放送、アクシデントはつきものです。この1年、いろいろなことがありました。私のNGはもちろん（苦笑）、双方向が上手くいかないことや、講師の方の緊張ゆえのアクシデント等々…。実は、その度活躍しているのは私の左耳のイヤホンなんですよ。

私がアナウンスをしているときに、私の耳には「番組の残り時間があとわずか」「次の準備にもう少し時間が必要だから話で時間を稼いで！」などスタッフ間のさまざまなやりとりが聞こえている場合があります。スタッフ間のやりとりを聞きながら私はアナウンスをし続けなければいけない、となると、その難しさは皆さんも想像できるかと思いますが、イヤホンはスタッフと私をつなぐ「命綱」といえるのかもしれませんが。

番組配信開始からもう1年。いや、まだ1年。私たちスタッフは、これからも講師の方が存分に自分の講義ができ、また受講生の皆さんに少しでもよい環境で情報を得ていただけるよう努力していこうと思っています。番組に興味を持たれた方は、スタッフともどもお待ちしておりますので、ぜひ1度スタジオに遊びに来てくださいね。



では、そろそろバトンタッチです。番組開始から何かとアドバイスをくださった私の心の師匠、白川幸太郎さん。現在は京都雇用促進センターでご活躍です。

では、幸太郎さんあとはよろしく！